

## 巻頭言



### 本学会の研究会活動について

永井 雄二†



石油ショック後のこの十年間、日本経済は大きな構造変化を経験している。多くの点でこの変化を指摘できるが、われわれにとっては経済社会の成熟化と技術革新の展開の二点が特に重要だろう。

経済社会の成熟化は量から質への価値感の多様化と個性化を促したほか、産業面でもサービス化とソフト化を一層おし進める結果となった。技術革新といえば、エレクトロニクス、新素材、光技術、宇宙技術等等各分野でまさに百花繚乱の感がある。ただ、単なる導入の技術ではなく独自の技術開発がますます要求されるようになってきている。中でもエレクトロニクス技術の発展は著しい。実に、現在はコンピュータとコミュニケーションを中心とした情報革命の真只中にあるといってよい。

経済または社会環境がこのようなとき、本学会に寄せられる期待は大きい。一方、本学会は明年創立25周年を迎える。人生25才といえ、生を受け自ら研鑽に努める時代を終わり、これからは他人のために働く時代に入る。まさに本学会としても時代の要請に答えるべきときを迎えている。

本学会の目的は「電子計算機等を中心とした情報処理に関する学術・技術の進歩発達をはかり、会員相互間および関連学協会との連絡研修の場となり、もって学術文化の発展に寄与すること」(定款第4条)にある。このため本学会は各種の事業を行う。研究会活動は、機関誌の発行、全国大会の開催、規格・標準化活動、IFIPへの協力などと並ぶ主要事業の一つである。むしろ研究会はこれらの諸活動の基盤となるものだろう。

さて、学会が時代の要請に答えるべく努力するとき、研究会は如何にあるべきか。ただ単に定型的に研究発表会を開催するだけの閉じたサークルであってはならないと考える。これからの時代、本学会の研究会は何よりも「開かれた場」を提供するものでなければ

ならず、受身的なものではなく、積極的に他に影響を与えるものでなければならない。二、三の提言を試みたい。

先ず、利用者サイドからの積極的な参加を期待したい。これからは「つくる」側からよりは「使う」側からの立場で技術を考える時代である。また学際化・業際化に備えて、非専門家の参加もますます必要となり重要となる。誰でもが自由に参加でき、誰でもが自由に発言できる雰囲気づくりが重要だろう。

技術者はオプティミストだといわれる。ややもすると良い面だけが強調され、悪い面の議論が疎かにされる。なる程、変化のないところに未来はない。しかし変化が常に進歩だとも限らない。また進歩の中で失われて行くものは一体何なのか。技術と人間との関係について、これまで以上にフィロソフィカルな議論が必要だろう。

新分野への挑戦が求められる。このためには若いエネルギーが存分に発揮される場でありたい。研究会にバイタリティを与えるため、若い人達が研究会の連絡委員として積極的に活躍されることを期待したい。むしろ思いきって連絡委員を若い研究者・技術者だけで構成してみてもどうか。研究の底辺を上げるためにも有効だろう。

本学会の研究活動の発展を願って、穂坂委員長のもと調査研究運営委員会が再編成されて間もなく二年が過ぎる。研究会運営にも新しい動きができてきている。地方開催の奨励、シンポジウム開催の奨励、非会員の発表会への参加、研究会活動における潤滑油的存在としての一号委員の増員、関連する本学会の規程類の改訂、研究会運営のための手引き書の作成などである。これらは皆、研究会を「開かれた場」とするための努力だと考えて頂きたい。

これからの本学会の諸活動を支えるものは研究会である。会員諸兄の積極的な参加をお願いしたい。

(昭和58年12月15日)

† 本会常務理事 (株)日立製作所ソフトウェア工場

